

稲賀繁美・日文研助教授インタビュー

イスラム、アジアの異国情緒に魅せられた西欧のオリエンタリズムやジャポニズムを研究している稲賀繁美・国際日本文化研究センター助教授(比較文化)が、安藤広重や葛飾北斎、ゴッホ、ゴーギャンら日欧の美術を論じた「絵画の東方」(名古屋大学出版会)を刊行。西欧と東方(オリエン)の錯綜した関係をどう考えたらいいかを聞いた。森 恭彦記者

「オリエンタリズム(東方趣味)は、パレスチナ出身の米の文学研究者、エドワード・W・サイードの同名の著書(一九七八年)で有名になった用語。稲賀氏も「出発点は共有している」と認める。

「サイードは、西側世界が外の世界を認識する構造そのものが犯罪ではないか、と問題提起した。ところがこうした見方が固定化されると、例えば仏領タヒチへ赴いたゴーギャンは植民地主義者で、島民の幼女を妻にした虐待者であり、そんな男を英雄視するのはけしからん、ということになる」

八九年、米仏で催されたゴーギャン回顧展の大ヒットを機

稲賀繁美・国際日本文化研究センター助教授

遠近法 日本でアレンジ

に、サイードの考えに同調する人々によるゴーギャン批判が高まった。

しかし、西と東、植民者と被植民者、男性と女性の対立を図式化して見るこの貧困さに疑問の声もあがり始めた。

「東がひたすら受け身の被害者だったというのは、間違っている。限られた東西のコンタクト・ゾーンで何かが起きた。文化の電位差によってパチパチ火花が生じたのではない。私はその火花を見ていきたい」

浮世絵 西欧が逆輸入

誤解から新しい芸術誕生

稲賀氏のいう「電位差」を敏感に察知し、それを身をもって火花のように生きたのがゴーギャンだった。媒介者としての画家の仕事こそ注目に値すると思う。

ここで、氏は「東西文化の錯綜した関係を、分かりやすく示しているのが透視図法遠近法だった」と指摘する。

この技法は世界を二元的に見通すための手段だが、十八世紀

半ばは日本に入ると、絵師たちはこれを勝手に換骨奪胎し、その原理を無視して、空間を「遠」と「近」に断片化。画面上で貼り合わせるという、借景的な技法に仕立てた。従来、これは日本側の「理解の不徹底」と見なされてきたが、氏は「日本の中で透視図法は変わった。それが今度ヨーロッパに逆輸入され、インパクトを与えた」という。

ゴーギャンの「美しきランジェ」は、室内を描いた画面の右半分を半円に切り抜き、プルトーニュ嬢の肖像をはめこんでいる。円い肖像画なのか、円窓の向こうに娘本人がいるのか、「誤解の相乗作用で新しい芸術が生まれる。だから誤解はいけないとは一概にいえない」

似たような事例は、政治や科学技術の分野でもあった。今回の本も、「姜尚中さん(東京大学教授、著書に「オリエンタリズムの彼方へ」など)や西川長夫さん(立命館大学教授、著書に「フランスの解体?」など)の本と一緒に読んでほしいと思う。」

「西欧の文法が、日本において脱構築されたようなもの。こ

うなってる、どちらが正しくて、どちらが間違っているかといえない」「正しい規範に縛られたアカデミズムに飽き足りない私の芸術家たちは、大胆な浮世



うなってる、どちらが正しくて、どちらが間違っているかといえない」「正しい規範に縛られたアカデミズムに飽き足りない私の芸術家たちは、大胆な浮世